第五章　自然環境の保護

第一節　開発事業等による動植物への影響

私たちの郷土、犀川町には、緑ゆたかな蔵持山（くらもてやま）、飯岳（いいだけ）（大坂山）、馬ケ嶽（岳）そして英彦山連峰よりつづく野峠、伊良原地区の山地など優れた自然に恵まれている。

また英彦山に源を発する今川や祓川の清流が町をうるおし、犀川の平野には、ため池や寺社をかこむ森が点在し、独特な自然を形成している。

しかし近年、本町でも少しずつ工業化が進むにつれて、宅地の造成、水面の埋め立てなどにより、自然の改変が進み、郷土の美しい自然が一つずつ失われようとしている。

それにより、本町の動植物も少しずつ影響を受けるようになってきている。

郷土の自然は、先人が私たちに残してくれたかけがえのない宝である。町民と行政が一体となって、これらの保全に努めるとともに町民一人ひとりの郷土を愛する意識こそ、これらを残していくかけがえのない力だと思う。

第二節　保護管理を要する動植物

一　個人所有のもの

唐椿　品種名　キャプテン・ロー（ツバキ科）

ツバキは、日本の特産種で、中国には自生はない。

一方、トウツバキの原産地は、ビルマとの国境に近い、中国雲南省のサルウイン川の流域である。

日本には、江戸時代に伝来したらしく『花壇地錦抄』（一六九五年刊）に、その名が出ている。ヨーロッパには、一八二〇年、イギリス人リチャード・ロウがもたらした。

東インド会社の船長（キャプテン）であった彼が、妹（バーヤ夫人）の土産に、当時、ヨーロッパでもてはやされていたツバキを持ち帰った。

その中に、トウツバキも含まれていたのである。

キャプテン・ローの名で、その品種は世界に広がったもので、兵庫県川西市の多田神社にある大樹も、同品種であるが、伝来されたのは、より古い（年代不明）。トウツバキは、その後欧米で改良されて、現在は他種との雑種を含めると、二五〇種もの品種が作出発表されている。

中国では、七〇種以上のトウツバキの品種があったが、一九五八年版の『雲南山茶花図誌』には、二一品種があげられているのみで、そのコレクションは雲南省の「昆明植物研究所」にある。

福岡県では、太宰府市北谷の田村政嗣氏宅と豊津町戸川氏（旧亀田氏）

宅と、河村氏宅とに各一本ずつあるのみである。

本町には木山の奥静子氏宅に一本あるもので珍しく貴重な樹である。九州では他に鹿児島に数株あると報道されているが確認はされていない。

。奥　静子氏宅のもの

樹幹周、地上一㍍で三五㌢、樹高六～七㍍ぐらいである。

樹齢は不明であるが、少なくとも一〇〇年以上と思われる。

毎年四月中旬の開花期には、八重咲きピンクのきれいな花を多くつけるので各地の愛好家が多数来訪、観賞している。

形態（形質）　葉は特徴的であるため、ニホンツバキや、サザンカと直ちに識別できる。表面がツバキほど光沢がなく、葉脈が網目状にくぼみ、表面灰色、裏面黄灰色を帯び鋸歯多数、短剛で鋭く中肋を中心として内側に折れ傾く（ツバキ・サザンカの一般的のものは、表面光沢あり、鋸歯は欠如のものが多く、鋸歯あるも粗剛ではなく、数も少なく、裏面に反転する）。また、側脈、網状脈ともに多く、特に網状脈に特徴があり、明らかに深くくぼんでいる。

唐　　椿（木山奥静子氏宅）

枝梢　幼時は茶褐色（当年枝）で、やや、光沢あるも、二年以後は灰白色無光沢となる。

小枝は、全般的に下垂して弱々しく見える（特に着花枝は、花の重りで下垂している）。ツバキ、サザンカとの区別点とするに足る。着花は、前年生の枝梢の先端に一個である。

花

花弁　桃紅色、波状弁、八重咲き重弁で、牡丹の花のような見事さである。大輪で、直径一〇㌢内外が普通である。

雄蕊　八重咲きのため、退化し少数で、十数本内外で、時に全く欠如するものもある。

（注）花弁は元来、雄蕊が変化してできたものゆえ、八重咲きのものは雄蕊が全く欠如したものが多い。

雌蕊　雄蕊と同長またはやや長い、子房には微毛は見られない。

果実　着果しない。八重咲きのため

特質　本種は、繁殖極めて困難である。その理由は果実ができない。したがって種子もできないので、実生は不可能である。原産地中国では着果するであろうが本邦では着果しないようである。

接ぎ木　挿し木で繁殖を図る以外に方法はないが、極めて困難で、現状では不可能視されている。

ツバキ類の接ぎ木（挿し木）の適期は、当地方では、二月下旬と七、

八月ごろであるが、県下各地並びに近県のツバキ愛好家が、数年にわたり穂木を実験しているが、残念ながらいまだに活着に成功した人はいないとのことである。

本種が、いつごろ、どうして奥家に栽植されたかは不明である。

二　神社、仏寺境内に存在するもの

オガタマノキ（黄心樹）（崎山神社境内）　モクレン科

常緑広葉樹で、大きいものは、高さ二〇㍍、径九〇㌢以上となる。樹皮は緑灰色、平滑で、若枝、芽、若葉の下面には、短い褐毛があるが後無毛となる。

葉は、互生、長楕円状倒卵～長楕円形、長さ五～一二㌢、全縁、先端は短尖形、基部は、鋭形、厚い革質で、上面濃緑色で光沢がある。

花は、三、四月ごろ、径三㌢ばかりの白花を腋生して開花する。基部は淡紅色を帯び、萼片、花弁ともに六枚である。

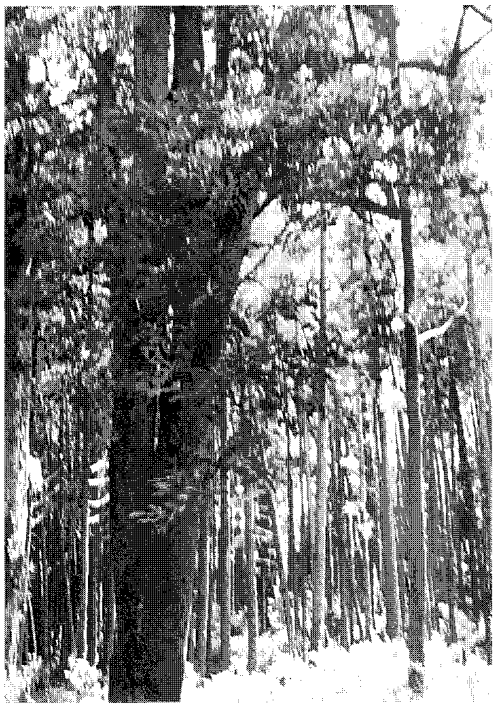
雄蕊と雌蕊の間には間隙がある。

果実は、長さ五～一〇㌢で十月から十一月ごろ、拳状赤色の袋果が、成熟し裂開して、大きな黒色の種子二個を出す。

宮崎県高千穂町天岩戸神社の神木として老大樹があり、宮崎県の各地の神社にも植栽されている。

遠く神代の昔、天岩戸の前にあった本樹に、御神鏡を懸垂したのが天岩戸神社の神木としての起源だと伝えられているが、繁殖栽培が困難のため普及されず、榊がこれに代用されるようになったものと思われる。

巫女や神楽の舞などに使用される神鈴は、この果実（袋果）の形を模したものと思われる。



オガタマノキ

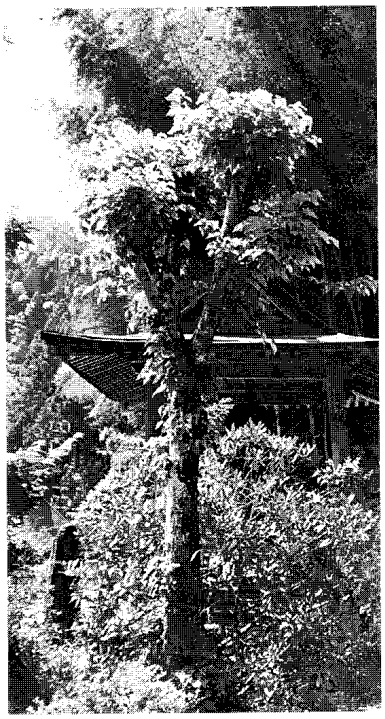
幹周　約一㍍　　樹齢推定　約八〇年

菩提樹（ボダイジュ）（崎山龍王寺境内）

ボダイジュには、シナノキ科の落葉高木とクワ科の常緑高木インドボダイジュ（テンジクボダイジュ）の二種がある。

前者は、中国原産、一五㍍以上の大木となり、街路樹にされ、材は彫刻材やマッチの軸木などに広く使われる。枝や葉には細毛が密生し、葉柄は短く、葉は三角状卵形。東北、北海道地方には、オオボダイジュ、ヨーロッパ中、南部には洋種ボダイジュがある。

後者はインドゴムノキの仲間で、インド原産。龍王寺にあるものもこれである。観賞用として温室で栽培される。無憂樹、沙羅双樹とても



教善寺の菩提樹

龍王寺の菩提樹

に、インドの三大聖樹とされ、釈迦が悟りを開いた木という。

全株無毛、葉柄は長く、葉は先端が尾状の広卵形である。

地域象徴動植物

「福岡県環境保全に関する条例」に基づき自然保護思想の普及高揚を図るため、その地域の自然環境を象徴し、人々に親しまれている動植物を市町村のシンボルとして選定している。

本町では町の花としてツツジ、サルビア、町の木としてヒノキ、サクラが指定されている。

本町内を流れる今川や、祓川は標高差もかなりあり、ほとんど澱みも無く、しかも大きな汚染源も無いので県内でも基準値以上の良い水質となっている。したがって、これらの川の上流には小さいサンショウウオやカジカが生息し、中流では、初夏にたくさんのホタルが見られる。

これらの動植物は、町民一人ひとりの気持ちによっていつまでも残していかなくてはならない。